大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第93集

有　添　田　遺　跡

－県道白丹竹田線（飛田川工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2017

大分県教育庁埋蔵文化財センター

有　添　田　遺　跡

－県道白丹竹田線（飛田川工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１７

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序　　文

本書は、県道白丹竹田線（飛田川工区）道路改良工事に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部竹田土木事務所の依頼を受けて実施した有添田遺跡の発掘調査報告書です。

有添田遺跡の所在する竹田市は大分県の南西部に位置し、大野川や稲葉川、玉来川などの河川が台地を侵食しながら蛇行して流れ、河岸段丘と深い谷が入り組んだ複雑な地形を形成しています。有添田遺跡のある稲葉川流域では、こうした河岸段丘上に多くの遺跡が残されています。

有添田遺跡は県道白丹竹田線道路改良工事により新たに発見された遺跡です。発掘調査では中世の石造物４基の記録作成と下部遺構の調査を行いました。その結果、宝篋印塔は南北朝時代末、板碑と宝篋印塔は戦国時代頃の作と分かりました。特に宝篋印塔は大野郡を中心に活躍した石大工「玄正」の系譜に連なる塔と考えられ、石造物資料に新たな知見を得ることができました。今回のような発掘調査成果を積み上げることで、具体的な地域の歴史解明につながるものと期待されます。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成２９年３月３１日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長　後藤一重

例　　言

1．本書は平成27年度に実施した、大分県竹田市大字平田字有添田13番に所在する有添田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は県道白丹竹田線道路改良工事の実施に伴い、大分県土木建築部竹田土木事務所の依頼を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は平成27年6月10日～6月26日にかけて実施し、大分県教育庁埋蔵文化財センター県事業班　　主査横澤　慈が担当した。

4．各発掘調査の実施に際し調査の支援業務委託を導入した。現地での写真撮影や遺構実測等の記録作成作業は県調査員の指揮監督の下、業務受託者である株式会社九州文化財総合研究所（調査技師　松浦　智、調査助手　杉原宗久）が行った。

5．出土品の遺物洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は平成28年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。報告書作成業務は平成28年度に実施した。上記委託業務以外の遺構・遺物図版の作成は横澤が行った。

6．出土遺物及び写真・実測図等の調査記録は大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市牧緑町１番61号）で保管している。

7．本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。

8．本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SK（土坑）、SX（性格不明遺構）

9．本書の執筆・編集は横澤が行った。

目　　次

序文

例言

目次

第１章　発掘調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4

第３章　発掘調査の成果 …… 6

第４章　総　括 …… 13

写真図版 …… 16

報告書抄録

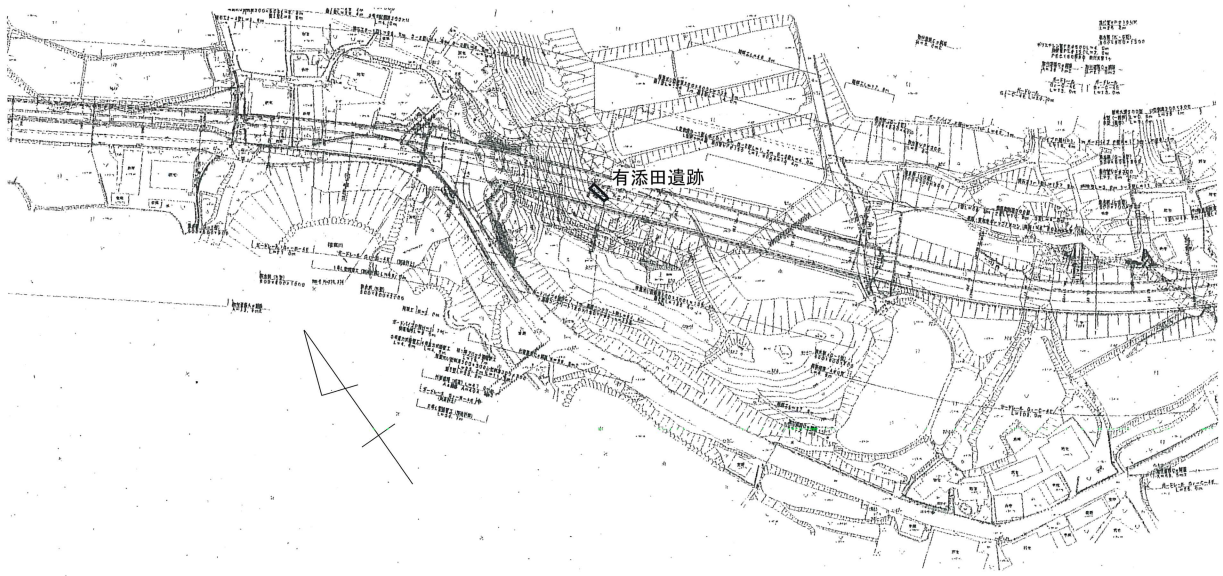
第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経緯

県道白丹竹田線（大分県道638号）は、竹田市久住町白丹から竹田市飛田川に至る一般県道である（路線長約17.1km）。調査の起因となった飛田川工区（事業延長882m）は、稲葉川と丘陵の間のわずかな平地を縫うように通っており、道路復員が狭い上に線形不良区間となっている。そのため、現道を拡幅し２車線化することで狭小な復員と線形不良区間を解消し走行性・安全性の向上を図るとともに、歩道の整備を行うことで地域住民の安全な通行空間の確保が期待されている。

平成26年度に県竹田土木事務所から竹田市大字平田地内山中の白丹竹田線道路改良事業地内に石造物が所在している旨の連絡があったため、まず当該箇所の分布調査を実施した。その結果、南北朝時代後半と推定される宝篋印塔1基、戦国時代頃と推定される板碑2基及び角柱塔婆1基の、計4基の中世石造物の所在が確認された。当該石造物は道路改良事業の実施により移転させる必要があるため、まず石造物の記録を作成し、移転に際しては下部遺構の確認が必要であるとの結論に達した。以上の結果を受けて、その取扱いについて関係機関で協議を行ったところ、当該石造物は個人所有ではあるが、所有者が県外在住であり個人での移転が困難であることから竹田土木事務所が道路改良事業

写真　白丹竹田線飛田川地区現況
（上：竹田側から　下：久住側から）



第1図　有添田遺跡調査位置図（S=1/2,500）

に併せて移転を行うため、平成27年度中に当該箇所の発掘調査を実施し、石造物の記録作成及び下部遺構の確認を行うこととなった。なお、遺跡名は当該地の小字名から有添田遺跡とし、平成26年6月25日付けで大分県教育委員会へ遺跡の発見を報告し、大分県遺跡台帳への登録を行った。

平成27年4月1日付けで竹田土木事務所長から大分県教育庁文化課長宛て埋蔵文化財発掘調査（本調査）依頼が提出され、同4月2日付けで発掘調査の受諾と実施計画書、所要経費見積書を回答した。6月3日には大分県教育委員会へ文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知た。発掘調査は平成27年6月10日から着手し、6月22日に現地での調査業務を終了、6月26日に調査器材等を撤収し調査を完了した。

第２節　発掘調査の経過

有添田遺跡の発掘調査は大分県教育委員会が主体となり、大分県教育庁埋蔵文化財センターを調査機関として実施した。調査の実施にあたり、作業員の雇用や労務管理をはじめ、人力による遺構検出・遺構発掘作業、記録写真撮影、遺構実測、現場管理、実測原図のデジタルトレース図作成等の業務を発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序・遺構面の確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら必要に応じて受託業者調査技師に作業の指示を与え、県調査員が常駐して全体を監督しながら調査精度を確保する体制をとった。作業班の構成は受託業者の調査技師・調査助手各1名、発掘作業員1日3名とした。

発掘調査ではまず4基の石造物について、実測図作成及び拓本採取、写真撮影等記録作成作業を実施し、その後石造物周囲の表土除去、石造物の撤去、石造物下部遺構の検出作業、遺構発掘作業を人力で行った。この間の調査の経過は以下に示すとおりである。

平成27年6月 2日　埋蔵文化財発掘調査支援業務委託の入札、業務受託者の決定
6月 4日　竹田土木事務所と発掘調査実施に係る現地協議、測量基準点の確認
6月 9日　調査事務所の設置、発掘調査区周辺の清掃、調査器材の搬入
6月10日　発掘調査前の写真撮影、個別石造物の写真撮影
6月12日　石造物の実測作業開始
6月17日　作業員3名を投入し、人力により表土除去開始
6月19日　調査区全体の遺構検出、宝篋印塔及び板碑の撤去
6月22日　角柱塔婆及び宝篋印塔基礎部材の撤去、調査区完掘状況の写真撮影
6月26日　竹田土木事務所と調査の完了確認、石造物及び調査現場の管理引き継ぎ

発掘調査の終了をうけ、平成27年6月26日付けで竹田警察署へ埋蔵文化財発見の通知を行うとともに、県教育庁文化課及び竹田土木事務所、竹田市教育委員会へ発掘調査の終了を通知した。同年7月24日には発掘調査支援業務受託業者から遺構実測図や記録写真等調査成果品の納入を受け、同7月28日の完了検査をもって業務を完了した。

第３節　整理作業・報告書作成の経過

整理作業及び報告書作成業務は平成28年度に実施した。整理作業は基本作業と資料作成業務を一括して委託し、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分けや収納等諸作業である。各作業工程ごとに調査担当者が完了を確認を行い、作業精度の確保に努めた。

報告書作成にかかる遺構・遺物実測図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行い、平成29年1月に原稿を入稿し、3度の校正を経て本書を刊行した。

第４節　調査組織の構成

有添田遺跡の発掘調査の体制は下記のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会
調査機関　大分県教育庁埋蔵文化財センター

平成27年度　本調査
調査総括　後藤一重　大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
小柳和宏　同　次長
調査事務　安藤正廣　同　管理予算班主幹（総括）
椎原由美　同　副主幹
田上　剛　同　主査
調査担当　小柳和宏　同　次長兼受託事業班参事（総括）兼県事業班参事（総括）
松本康弘　同　県事業班主幹
横澤　慈　同　主査（調査担当）
発掘調査支援業務受託者　株式会社九州文化財総合研究所
調査技師　松浦　智
調査助手　杉原宗久

平成28年度　整理報告書作成
調査総括　後藤一重　大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
小柳和宏　同　次長
調査事務　安藤正廣　同　管理予算班主幹（総括）
田上　剛　同　主査
志賀恵子　同　主査
調査担当　小柳和宏　同　次長兼県事業班参事（総括）
江田　豊　同　資料管理班参事（総括）
綿貫俊一　同　課長補佐
横澤　慈　同　県事業班主査（整理報告書作成担当）
整理作業委託受託者　株式会社九州文化財総合研究所
整理作業指導員　畦津宏幸

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

竹田市は大分県の南西部に位置する。北は大分市、由布市、九重町、東は豊後大野市と境界を接し、南と西は熊本県、宮崎県とも県境をなしている。市域の周囲は阿蘇山外輪山や九重山、祖母山をはじめとした1,000m級の山々に囲まれた盆地地形を形成している。これら山岳の多くは火山であり、竹田市の地形はこうした火山の影響を大きく受けている。特に活火山である阿蘇山の影響は大きく、外輪山の周縁に広大な火山性台地を形成している。また、約30万年～約9年前の間に4回の大噴火を起こしており、その中でも約9万年前の火山活動で形成された阿蘇熔結凝灰岩（阿蘇4火砕流堆積物）の露頭が市内の至る所で見られる。竹田市飛田川他の露頭は「竹田の阿蘇火砕流堆積物」として国の天然記念物に指定されている。

河川は祖母山に源を発する大野川と、九重山や阿蘇外輪山から流れる稲葉川や玉来川などの河川が火山性台地を浸食して深い渓谷を作り出している。これら河川は大きく蛇行しており、竹田市街地周辺で大野川に合流し別府湾に流れ込む。平地は少なく、集落や農地はこうした河川が形成した谷地の段丘面を中心に展開している。

産業は農林業が中心で、主要河川の谷地部に水田、高原地帯は畑作や畜産が盛んである。また、九住高原や長湯・久住等の温泉、岡城跡や竹田城下町をはじめとした観光業も行われている。

第２節　歴史的環境

竹田市に展開する、菅生台地や荻台地などの火山性台地を中心に、縄文時代早期～晩期の遺跡が展開する。特に後期後葉に集落が急増し、下坂田西遺跡のような大規模な集落も出現する。弥生時代～古墳時代前期にかけても火山性台地上で遺跡の展開が認められる。菅生台地の石井入口遺跡はその代表格で、弥生時代後期～古墳時代の竪穴約180基が確認され、遺跡全体では900基あまりの竪穴建物が想定される大集落である。しかし、こうした火山性台地上の集落遺跡は古墳時代前期以降小規模化し、やがて集落形成が認められなくなる。

一方、河川流域の平地部では弥生時代後期以降集落形成が認められる。有添田遺跡のある稲葉川流域では下坂田東遺跡や城原神社遺跡等がある。有添田遺跡周辺では南光寺遺跡や横舞遺跡、下井出遺跡、下村遺跡、坂折遺跡、市用遺跡、平原遺跡等、小規模な集落遺跡が見られる。また、集落に近接して南光寺横穴群や塩付横穴群、下原横穴群、成迫横穴群、市用横穴群といった横穴墓群が形成される。

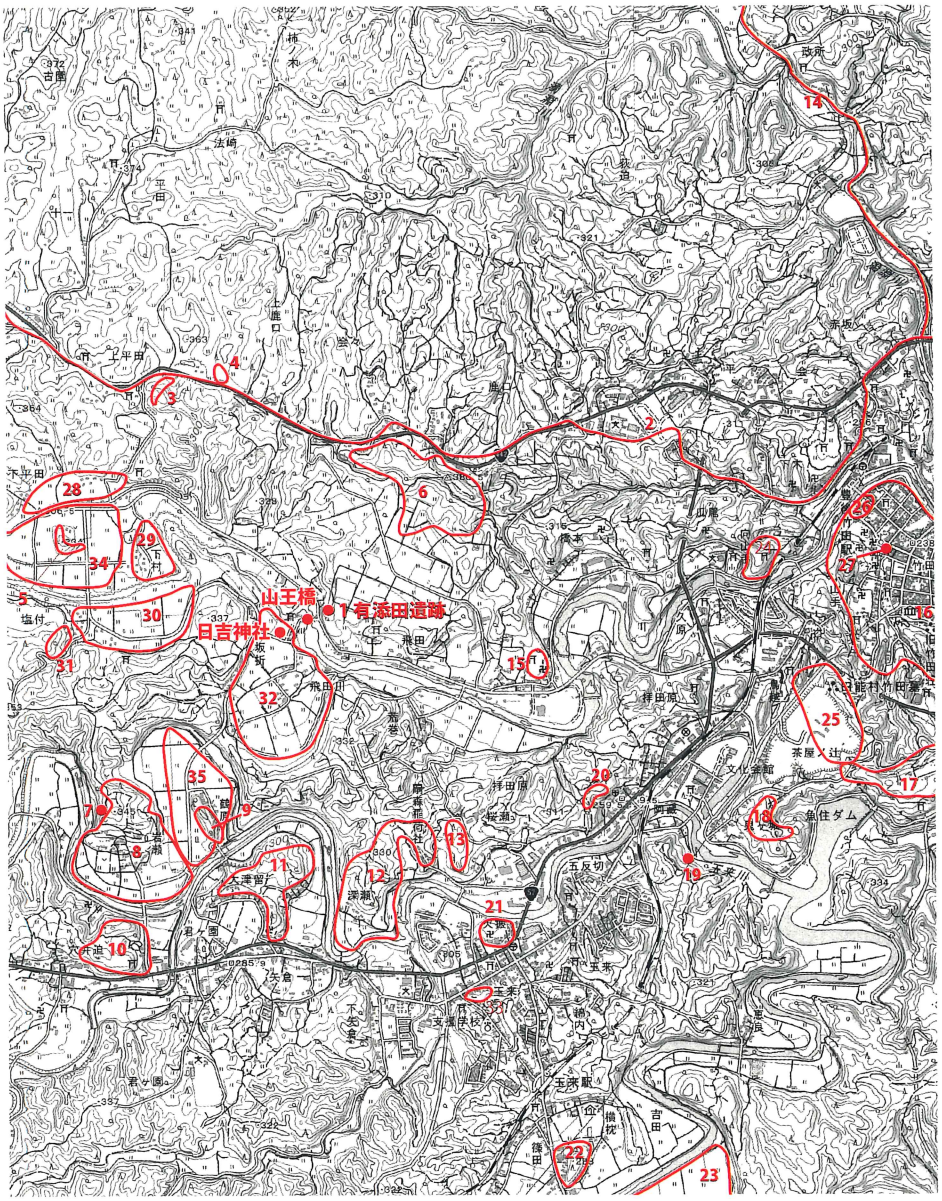
古代には直入郡に編入されているが、直入郡の郡衙や駅の所在などは明らかにはなっていない。中世には豊後国に大友氏が守護として入封し、直入郡も14世紀には守護領となったが、その後大友氏庶流の志賀氏の勢力下に入る。志賀氏は岡城を居城とし、周囲には騎群城などの支城も築かれている。文禄3年に中川秀成が竹田に7万4000石で入封し、岡城や城下の整備を行っている。現在の竹田市街地は近世の城下町が基盤となっている。明治10年の西南戦争では竹田市も戦場となり、薩軍の一部が竹田を急襲し岡城を占拠している。堀田政一の結成した竹田報国隊など、薩軍側として加わった勢力もあった。騎群城跡や法師山には西南戦争の台場（塹壕跡）が確認されている。

行政上の竹田市ついては、まず明治22年の町村制施行で竹田町が成立し、その後いくつかの変遷を経て昭和29年に竹田市（旧竹田市）が誕生、その後平成17年のいわゆる平成の大合併で、旧直入郡（荻町・直入町・久住町）と合併し、現在の市域となっている。

第３節　有添田遺跡周辺の遺跡・文化財

有添田遺跡は竹田市大字平田の山中に位置する。遺跡のすぐ側を稲葉川が流れ、川を挟んで対岸に坂折遺跡がある。県道白丹竹田線を久住方面に1kmほど進むと下村遺跡や横舞遺跡、南光寺遺跡があり、その対岸に塩付遺跡が位置する。遺跡の北方丘陵上には騎群城跡、東には仏巌寺遺跡が所在する。稲葉川にかかる坂折集落に至る石橋「山王橋」は竹田市の有形文化財に指定されている（図版3）。また、坂折の日吉神社境内には石幢や宝篋印

塔など数基の中世石造物が所在する（図版3）。



番号	遺跡名	遺跡種別	時代	遺跡番号	番号	遺跡名	遺跡種別	時代	遺跡番号
1	有添田遺跡	石塔群	中世	208	19	阿蔵洞穴	岩陰	縄文	208100
2	岡城路（肥後街道）	その他	近世	208001	20	五反切洞窟	包蔵地他	縄文	208101
3	下原横穴群	墳墓	古墳	208069	21	真正寺遺跡	寺院	中世ほか	208102
4	成迫横穴群	墳墓	古墳	208070	22	神楽岡寺遺跡	包蔵地	縄文（晩期）	208103
5	南光寺横穴群	墳墓	古墳	208071	23	中尾遺跡	包蔵地	縄文	208104
6	騎群城跡（騎牟礼城跡）	城跡	室町	208072	24	向山手遺跡	屋敷跡	江戸	208142
7	岩瀬岩陰	岩陰	縄文ほか	208073	25	茶屋ノ辻近世墓地群	墳墓	江戸	208143
8	岩瀬遺跡	集落	弥生・古墳・中世	208074	26	宇野家屋敷跡	館跡	中世・近世	208148
9	鶴原横穴群	墳墓	古墳	208075	27	立花屋跡	館跡	近世	208149
10	柱立神社遺跡	包蔵地他	古代他	208076	28	横舞遺跡	集落	弥生・古墳	208153
11	大津留遺跡	包蔵地他	中世	208077	29	下村遺跡	集落	弥生・古墳	208154
12	深瀬遺跡	包蔵地他	中世ほか	208078	30	塩付遺跡	集落	弥生・古墳	208156
13	扇森山横穴	墳墓	古墳	208079	31	塩付横穴墓群	墳墓	古墳	208157
14	岡城路	その他	近世	208081	32	坂折遺跡	集落	縄文・弥生・古墳	208159
15	仏厳寺遺跡	寺院	中世ほか	208084	33	玉来横穴墓	墳墓	古墳	208167
16	城下町遺跡	包蔵地他	中世ほか	208085	34	南光寺遺跡	集落	弥生・古墳	208468
17	上角遺跡	包蔵地他	中世ほか	208098	35	鶴原遺跡	集落	古墳	208469
18	鬼ヶ城跡	城跡	室町	208099					

第2図　有添田遺跡と周辺の文化財（国土地理院発行2万5千分1地形図（桜町・竹田）に加筆）

第３章　発掘調査の成果

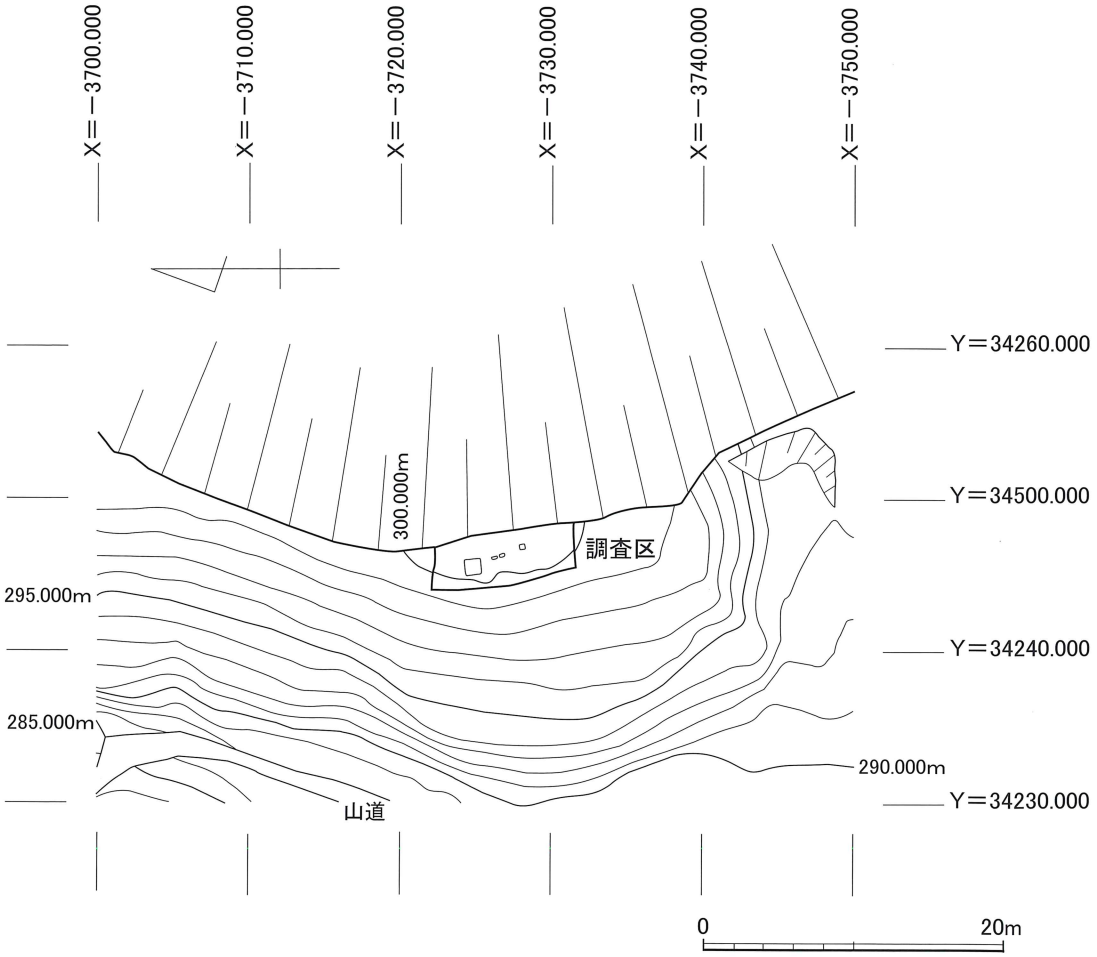
第１節　調査区の設定

有添田遺跡の発掘調査は、分布調査で確認された4基の石造物の記録作成と下部遺構の確認を目的としたため、石造物群の周囲を発掘調査区として設定した。調査区は細い尾根上であるが、東側は過去の造成により大きく削り取られ、断崖となっている。発掘調査面積は32㎡である。

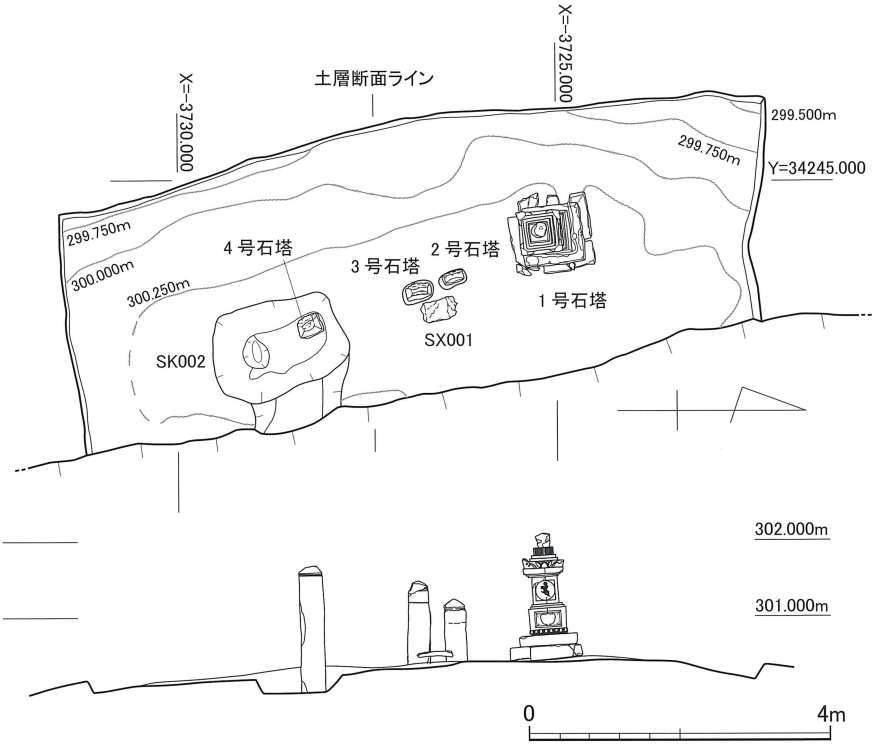
発掘調査では、4基の石塔にそれぞれ番号を付し、宝篋印塔を1号石塔、2基の板碑をそれぞれ2号・3号石塔、角柱塔婆を4号石塔とし、記録を作成した。、また、発掘調査で新たに確認した遺構については、検出した順に「S-○○○」の3桁の番号を付した。報告書作成時には調査時の番号をそのまま踏襲し、遺構の種類に応じた略号を新たに付与した。

第２節　調査区の層序

発掘調査区の層序を第5図に示す。第1層は暗褐色土の表土（腐葉土）である。層厚は10cm程度であるが、西側斜面部は流れ込みや樹木根の影響をうけており、やや厚く堆積している。第2層は淡灰黄褐色土の地山層である。調査区東部では軟質の凝灰岩片を多く含むようになり、岩盤層に続くものと思われる。



第3図　調査区周辺地形図（1/500）



第4図　調査区平面図（1/100）

第3節　遺構

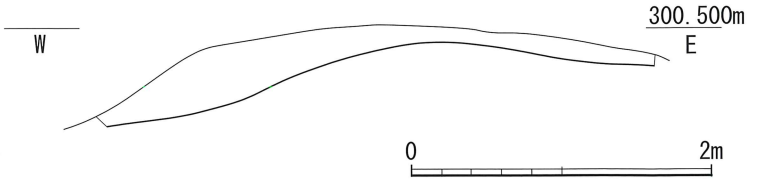
1号石塔（第6図）

熔結凝灰岩製の宝篋印塔である。相輪を欠き、後家合せで宝珠が載せられているが、それ以外の部材は揃っている。総高166.5cm、基壇組みの最大幅96.0cmを測る。

基礎は3段からなる。最下段の基壇組みは6石からなり、その中心部には1～5cm大の凝灰岩片を含む暗灰色土が堆積していた（第7図）。基壇組の石材の間に3箇所で針金が差し込まれている状況が確認された（図版6）。おそらく数十年前に他所から移転させた際に、針金を十字に渡して吊り下げたものであろう。こうした状況を示すように、この基壇組みと堆積土を除去し下部遺構がないかの確認を行ったが、土坑などの掘り込みは確認されず、遺物も出土しなかった。

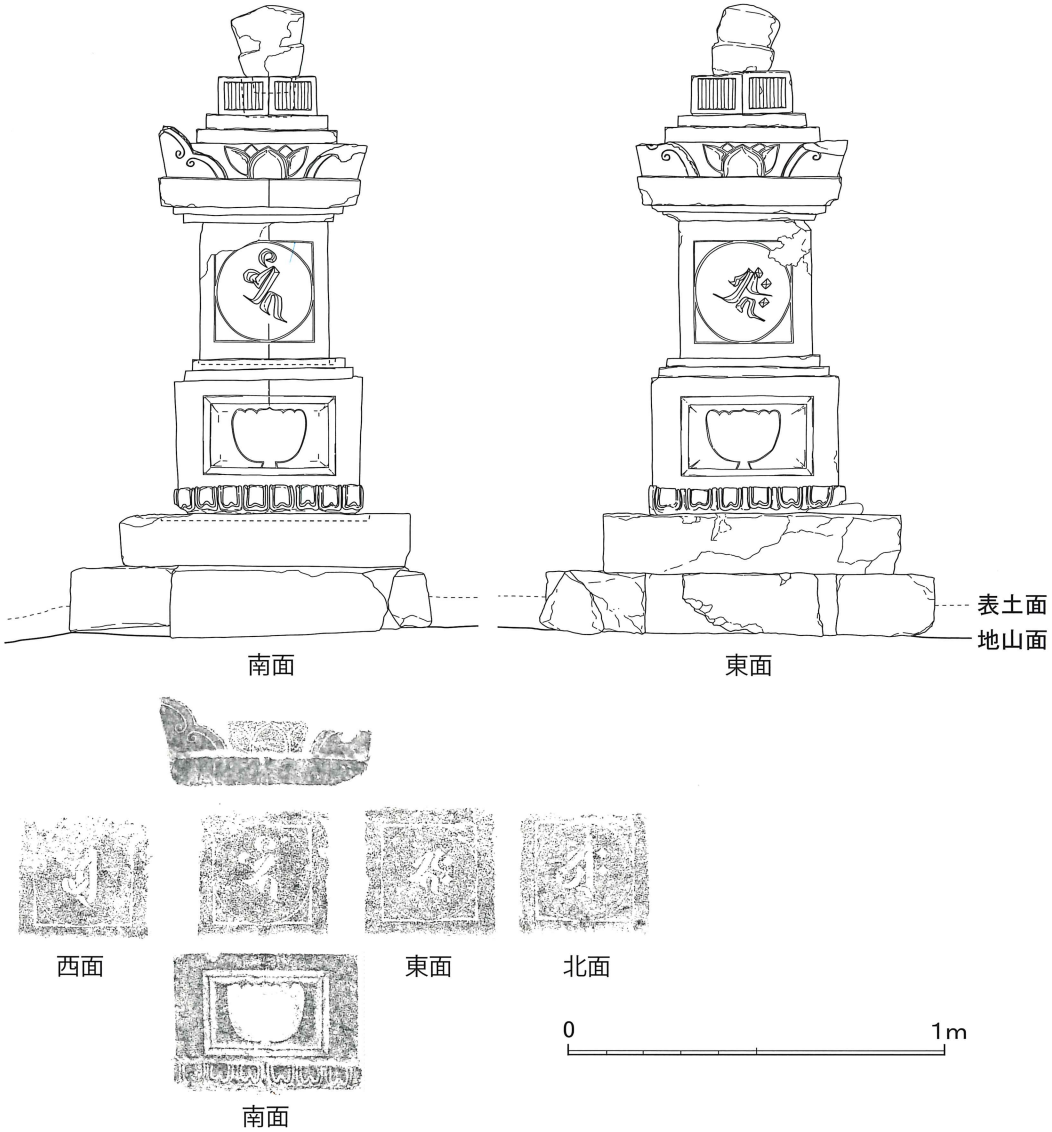
基壇2段目は1辺77cmの1石からなり、上面は基礎石を受けるため1.5cm程度掘り込んでいる。基礎石は1辺約50cmで、下部には覆輪付きの複弁蓮弁文を施す反花を配す。側面は4面とも格狭間を配し、南面の格狭間上部には中軸の割付線が見られる。上部には2段の段を有する。

塔身は1辺約34cmを測り、方形区画内に円相を配しその中に薬研彫りの梵字種子をあしらう。種子は北面はアク、東面はカーク、南面はバイ、西面はユである。種子の中には墨を塗った痕跡が認められる。また、各面には十字の割付線を彫っている。



第5図　土層模式図（1/50）

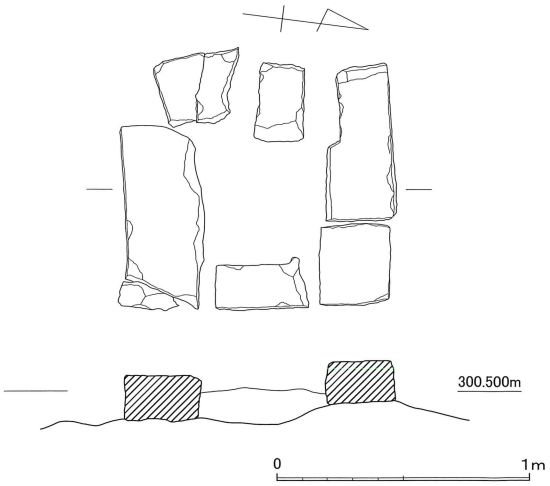
笠は1辺53cmを測り、四隅の隅飾



第6図　1号石塔実測図（1/20）

突起は南面左側を除き上部を欠いている。立ち上がりは外に開く鈍角三角形状を呈し、上辺は下弦の連弧状となる。上辺に沿って1条の連弧沈線と、その内側に対向する蕨手文を施す。段形は上部3段、下部2段である。1段目は隅飾の間に中央に大きな蓮弁を配し、その両側にそれぞれ2弁の蓮弁を配した開花蓮をあしらう。上部段の上には露盤が立ち、左右に4.5単位の縦連子を刻む。上面には相輪を受けるためのほぞ穴を穿つ。ほぞ穴の規模は直径14.5cm、深さ10cmを測る。

宝珠は失われた相輪の代用で、五輪塔の空風輪を後家合せで載せたものである。下端部には長さ4cm



第7図　1号石塔基壇組実測図（1/30）

のほぞを持つ。一部に表面の剥落が認められる。空輪と風輪の境が痕跡的で、年代的には宝篋印塔よりも後出するものであろう。

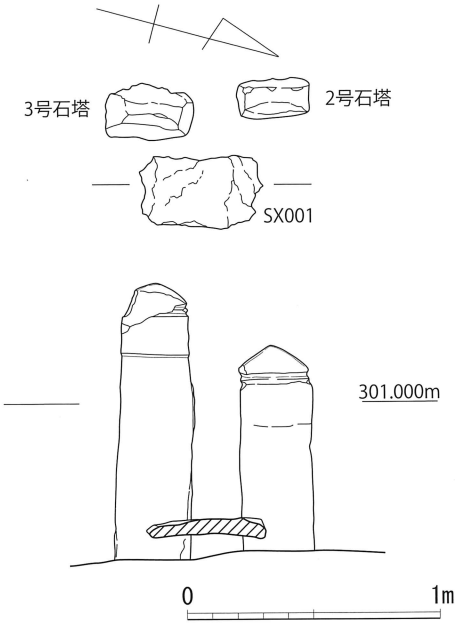
SX001（第8図）

表土除去中に確認された遺構で、2号石塔・3号石塔の正面側の前に置かれた平石である。長辺28cm、幅28cm、厚さ9cmの扁平な凝灰岩を地山面に据えており、土坑などの掘り込みは確認できない。供物等を置くための台石と考えられる。

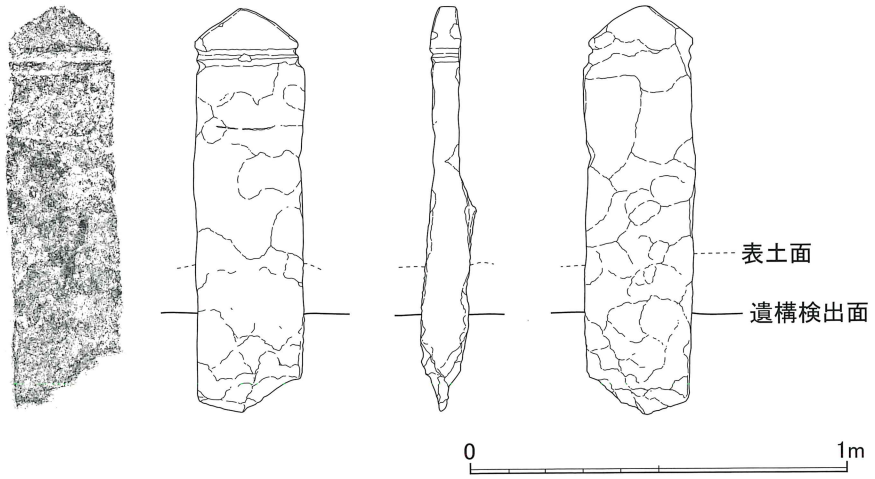
２号石塔（第9図）

熔結凝灰岩製の板碑である。総高106.5cm、幅29.0cm、厚さ6.5～13.0cmを測る。地山面から約25cm埋め込まれ、さらに表土が13cm堆積した状態であった。板碑の周囲を一回り大きく掘り込んで埋めた程度で、特に下部構造は確認されなかった。

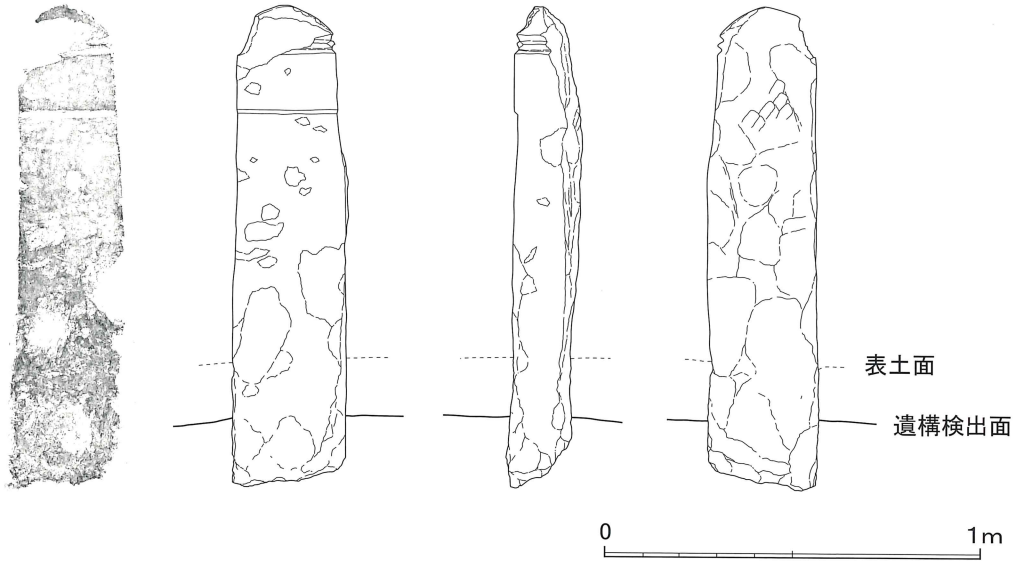
形状は直方体で、上部は三角形に作る。碑の正面及び左右両側面は調整を施すが、背面には粗い調整痕が全体に残る。上部には薬研彫りで2条の切込みを有し、その下16～17cmで低い段



第8図　2・3号石塔とSX001（1/30）



第9図　2号石塔実測図（1/20）



第10図　3号石塔実測図（1/20）

を付けて額部を作り出すが、極めて痕跡的である。碑面には種子及び銘は確認できない。墨書銘であった可能性もある。

３号石塔（第10図）

熔結凝灰岩製の板碑である。総高125.5cm、幅26.0～30.0cm、厚さ15.0～17.5cmを測る。地山面から19cm埋め込まれ、さらに表土が15cm堆積した状態であった。下部構造については2号石塔と同様で、板碑の周囲を一回り大きく掘り込んで設置したものである。

形状は2号石塔より厚みのある石材を使用し、上部は三角形に作るが頂部は丸みを持つ。碑の正面及び左右両側面は調整を施すが、背面には粗い調整痕が全体に残る。上部には薬研彫りで2条の切込みを有し、そこから15cm下がった位置で1cm程度の段を付けて額部を作り出す。2号石塔同様、碑面には種子及び銘は確認できず、墨書銘であった可能性もある。

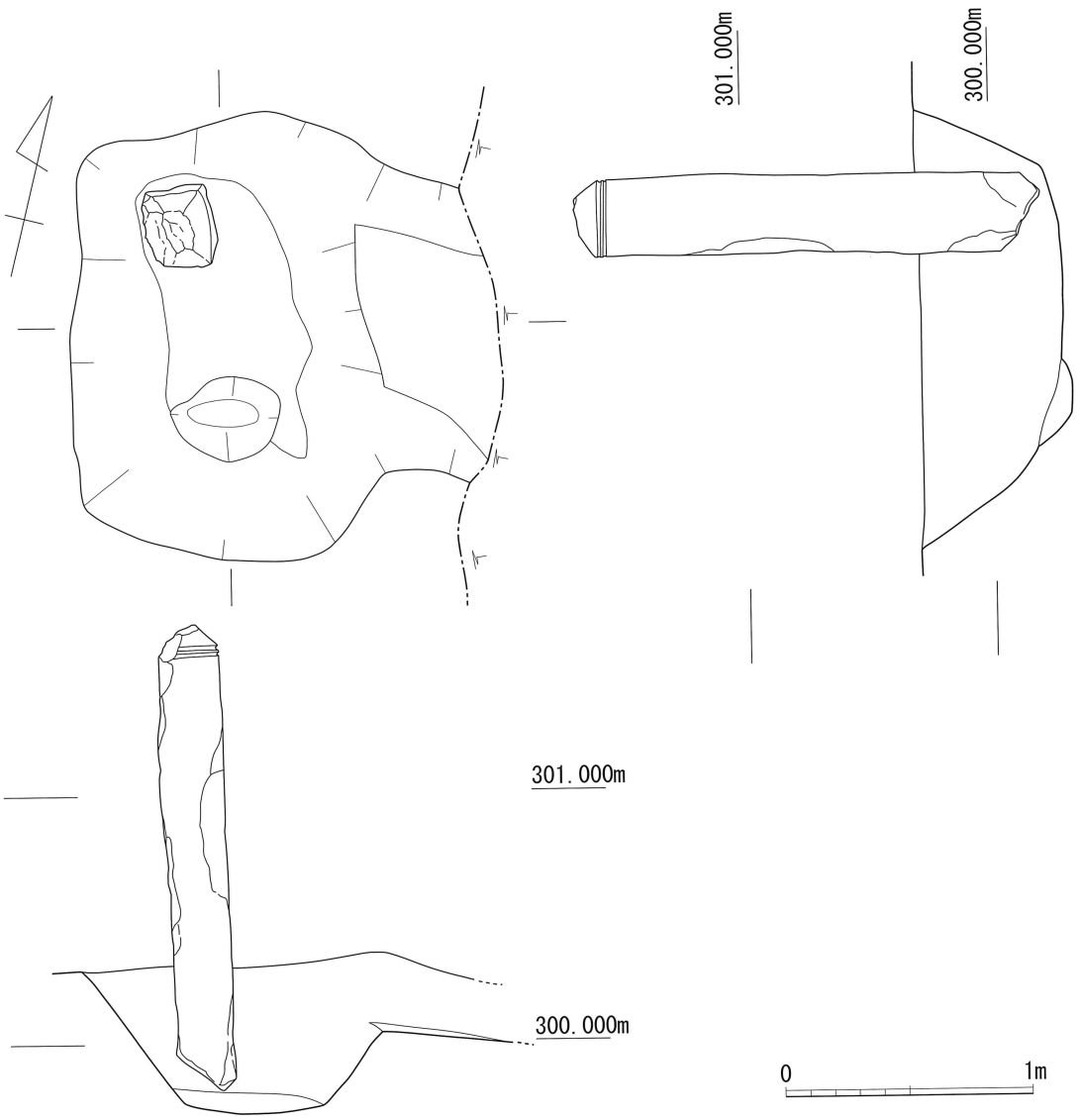
SK002（第11図）

4号石塔の周囲で検出した土坑である。長辺184cm、幅は調査区外に続くため全体は明らかにできないが172cm以上、深さ60cmを測る。土坑の北西端寄りに4号石塔が位置する。土坑の埋土は黒褐色土で、軟質の凝灰岩細片を多量に含む。土坑の東側は1段低いテラス状を呈し、土坑の底面の南端部には浅い窪みが見られる。石塔の位置と埋土が単純であることから、石塔設置のために土坑を掘り、土坑の一端に押し込んで石塔を起こした後、一度に掘削土を埋め戻して据えつけたものと考えられる。

４号石塔（第12図）

熔結凝灰岩製の角柱塔婆である。総高188.0cm、正面幅33.0cm、側面幅26.0cmを測る。SK002の検出面から56cm埋め込まれ、さらに表土が12cm堆積した状態であった。

塔婆の形状は直方体で上部を三角形に作る。上端の基底部には薬研彫りで2条の切込みを入れる。額部はなく、

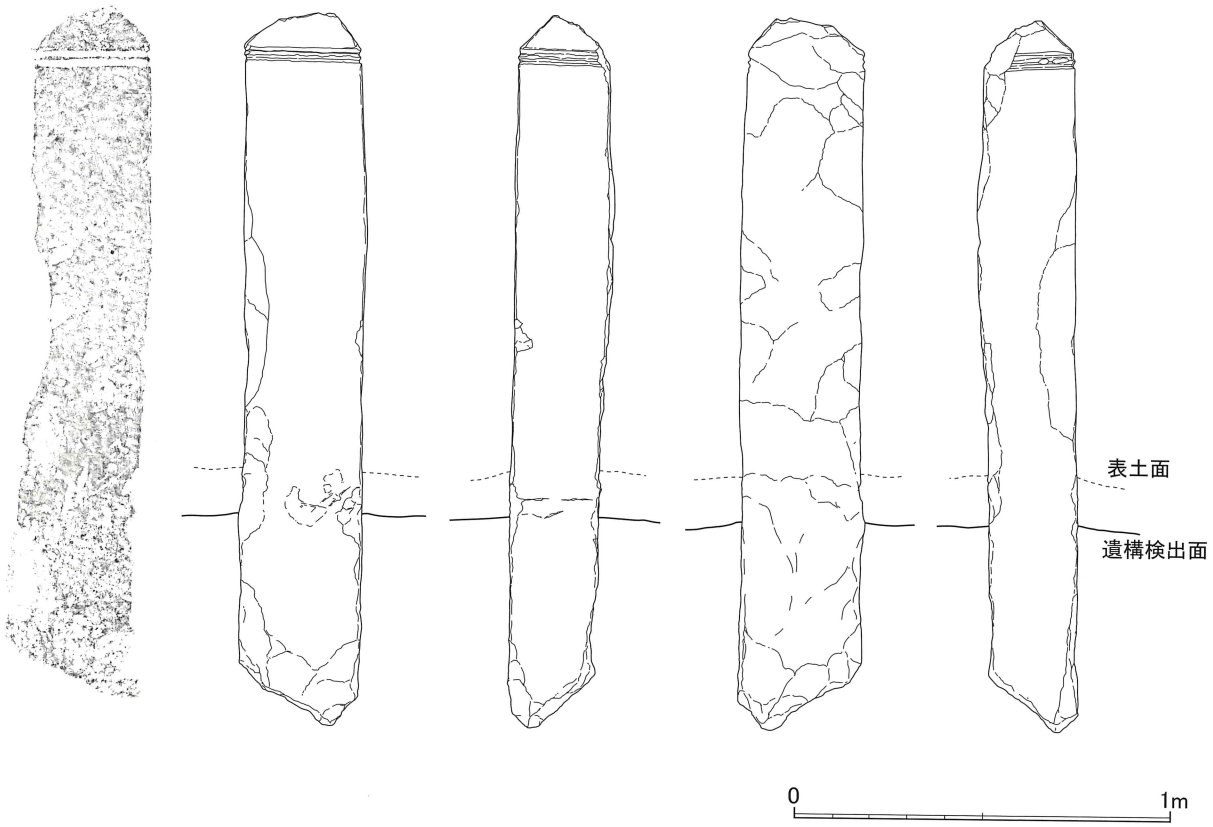


第11図　SK002実測図（1/30）

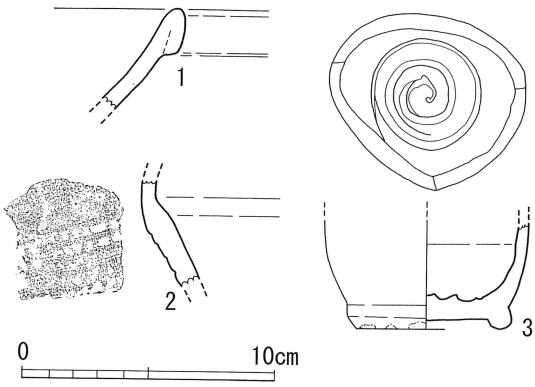
正面及び両側面は平坦に調整を施し、背面には粗いノミ痕が残る。2・3号石塔同様、碑面には種子及び銘は確認できず、墨書銘であった可能性もある。

採集遺物（第13図）

県道から調査区へ至る山道で採集した遺物である。内3点を図示した。1は焼締陶器の鉢である。口縁部は折り返して玉縁状に作る。2は焼締陶器の壺の頸部から肩部であろう。内面には細かい方形の当具痕が残る。3は磁器の瓶である。胴部は直に立ち上がり、底部はややすぼまる。見込みには渦巻状の轆轤成形痕が残る。内面及び高台畳付は露胎である。いずれも近世以降のものであろう。



第12図　4号石塔実測図（1/20）



第13図　有添田遺跡周辺採集遺物実測図

第1表　有添田遺物観察表

挿図番号		器種		出土地点	法量（cm）			器面調整		焼成	色調
					直径		器高	外面	内面		
第13図	1	焼締陶器	鉢	調査区周辺採集			(3.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	暗褐色
	2	焼締陶器	壺	調査区周辺採集			(4.2)	ナデ、自然釉付着	方形当具痕	良好	暗褐色
	3	磁　　器	瓶	調査区周辺採集	底径	5.7	(4.2)	施釉	露胎、渦巻状の成形痕	良好	灰褐色

第4章　総　括

第1節　石造物の年代的位置づけ

有添田遺跡で確認された4基の石造物は、いずれも造立年や造立者（願主・製作した石大工等）・造立目的を記した銘文がなく、年代・造立背景とも不明である。また、出土遺物も皆無であることから、発掘調査でそれの手がかりは得ることができなかった。本節では石造物の形態的特徴について、他の石造物との比較を通じてその検討を行いたい。

（1）1号石塔について

まず1号石塔とした宝篋印塔である。宝篋印塔の特徴としては、①笠の隅飾突起の間に開花蓮を彫る、②塔身には4面に円相と薬研彫りの種子を配する、③基礎下端に反花座を持つ、といった装飾的な特徴が挙げられる。このうち①については、豊後大野市千歳町の福正寺宝篋印塔（1）や同三重町法泉庵宝篋印塔（2）、同三重町西岸寺宝篋印塔（3）、同大野町妙見宝篋印塔（4）、同大野町表2号（5）・3号（6）宝篋印塔など、豊後大野市を中心にその類例が知られる。上記のうち、（1）～（3）は銘文から石大工玄正（玄聖）の作と判明する。

③の基礎下端の反花座についても、玄正及びその系譜の石塔に認められる特徴である。原田昭一氏の分析（註1）では、反花座の表現は陽刻するものから、室町から戦国期のものは線刻表現に退化するとされる。有添田遺跡のものは陽刻で表現しており、古手の様相を示すと考えられる。

また、露盤に刻まれた2区画の縦連子についても、玄正作のものは6～9単位であるのに対し、有添田遺跡1号石塔では4.5単位とその数を減じている。これも玄正系石造物の退化傾向を示す特徴として捉えられる。しかし、より退化した特徴である縦方向の連続した陰刻線の表現にはなっていないので、退化が始まった段階として捉えられよう。

以上の点から、1号石塔は玄正の系譜に連なる石工の作と考えられる。銘文から玄正作と判明する石造物は正平18年（1363）～永和2年（1376）で、作風から玄正作と判断されるもの（原田氏のいう玄正型宝篋印塔）を含めても、その下限は康暦2年（1380）までである。1号石塔は玄正作の塔と比べて退化している特徴が認められるものの、退化傾向が少ない点は古相を示すといえる。従って、年代としては1381年を上限とした比較的古い時期が考えられ、南北朝時代末期（14世紀末）に位置づけられよう。

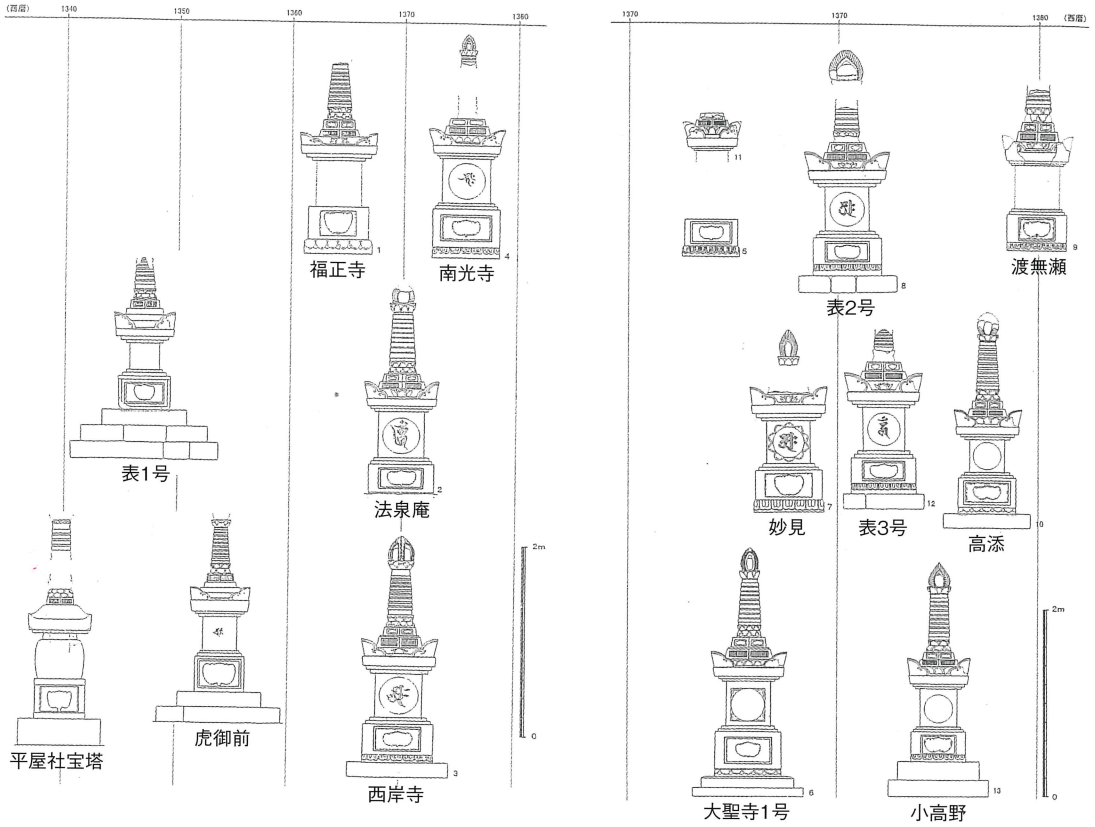
（2）２～４号石塔について

2・3号石塔は板碑、4号石塔は角柱塔婆である。板碑はいずれも頭部を三角形状に尖らせる整形板碑で、頭部下端に2条の切込みと、その下にわずかに額部を作り出している。原田昭一氏は大分県内の紀年銘のある板碑資料から編年を行っており（註2）、その分析に基づき板碑及び角柱塔婆の年代を推理する。年代推理で注目する点として、①額部の切込み、②額部の突出を取り上げる。

まず①であるが、切込み正面形態は上下2条の切込みが2cm以内に近接するⅢ－ａ類型に該当する。この類型は概ね14世紀中頃までで途絶え、以後2条切込みの間隔が開くもの、切込みが1条のもの、切込みを持たないものが出現する。また、切込み側面形態は、前面切込みが側面にも延びるⅣ－ａ類型である。側面切込みは15世紀後半まで主流で、それ以降の資料は特定工人に限定されるという。15世紀後半以降は側面に切込みを持たないもの、切込みを全くもたないものが主流となる。

②は額部を碑面より突出させるがその度合いが低いⅦ－ｂ類型に該当する。この類型は1470年代から流行する傾向にあり、それ以前に流行する額部を高く突出するものからの退化傾向を示すと考えられる。その後、額部と碑面の境に陰刻細線や断面三角形状陰刻を施して境界を表現するものが出現し、1540年代以降は額部と碑面の境界表徴が見られないものが主流になる。

以上の点から有添田遺跡の板碑を見ると、まず①切込み正面形態及び側面切込みからは14世紀中ごろまでの年代が考えられるが、側面切込みの点では15世紀中頃までが該当する。一方②からは1470～1540年頃までの範囲が考えられる。①と②がうまく整合しないが、突出度合いの低さというより後出的な様相を重視して15世紀中頃の



玄正作・玄正型宝篋印塔の編年図（左：玄正作・右：玄正型）

属性別の板碑編年案（左：額部突出・右：額部側面切込）

第14図　宝篋印塔・板碑の編年図（宝篋印塔：原田2007・板碑：原田2009からそれぞれ引用・一部変更）

第14図　板碑の形式変化

可能性を考えたい。なお、額部の突出は3号石塔に比べ2号石塔のほうが痕跡的であり、2号石塔はそれよりも後出する可能性が高く、15世紀後半と考えたい。

4号石塔については2条の切込みを有するが額部の突出が見られない。しかし切込みは細線化していない点では古い要素を持つ。角柱塔婆は板碑と同じ型式的特徴を持つ（註3）ことから、年代的には2号石塔に近い15世紀後半頃のものと考えられる。

第２節　遺跡の評価

有添田遺跡の発掘調査では4基の石造物を調査することができた。大分県教育委員会では平成20～26年度にかけて県内に所在する中世石造物の詳細分布調査を実施しており、県内に約3,600箇所の石造物所在地と、約28,000基の石造物の存在を確認した。その成果を報告書地名表編として刊行している（註4）が、その時点では有添田遺跡の石造物を把握しておらず、新たな資料を加えることができたことは大きな成果である。

石造物の年代については前節で検討したが、宝篋印塔が14世紀末、板碑・角柱塔婆は15世紀中～後葉の2時期のものがある。1号石塔は石大工玄正に連なる工人の作と考えられる装飾的な宝篋印塔で、貴重な類例を追加することができた。発掘調査では1号石塔の基礎組みから針金が数本検出されており、近年他所から移転させたものであろうことが想定される。遺跡周辺では1980年頃にカボス園の造成が行われており、遺跡も尾根が大きく削平された状況であった。可能性としてはこの時に造成地内にあった宝篋印塔を、板碑・角柱塔婆のある場所へ移転させたことが考えられる（註5）。2～4号石塔についてはいずれも東側に面を揃えて建てられており、原位置を保つ可能性が高い。中世石造物の下部構造を調査した事例は少ない中で、新たなデータを提供できたものといえる。

どの石塔にも造立年代や造立背景を示す銘文がないため、その具体的な背景に迫ることは困難であるが、中世における信仰の一形態を示す遺跡であることは間違いない。石造物は所有者によって移転されて残されるが、石造物のあった場所は本調査の記録を残して失われてしまう。石造物は本来土地と一体となってその正当な評価（美術的側面だけでなく、その場所の持つ意味や造塔背景など）に迫ることができるものである。こうした観点から、今後、石造物の適切な保護が図られることを願って総括としたい。

註1）原田昭一2005「中世における石造物流通の一様相－「玄正（玄聖）銘宝篋印塔の流通をとおして－」『日引』第7号、石造物研究会

註2）原田昭一2004「板碑変遷史－豊前・豊後における紀年銘板碑を通して－」『古文化談叢』第51集、九州古文化研究会

註3）原田昭一2009「角塔婆変遷史－豊前・豊後における紀年銘資料を通して－」『石造文化研究』第27巻、おおいた石造文化研究会

註4）大分県教育庁埋蔵文化財センター2013～2015『大分の中世石造遺物』第1～3集（分布図・地名表編（上・中・下））。うち有添田遺跡のある竹田市は報告書第2集（中）に掲載されている。

註5）地元住民から同様の聞取りがあったと竹田土木事務所担当者から教示を得た。ただし地元住民にもあまり知られていない塔であったようである。

図版1

1号石塔南面（遺構検出時）

2・3号石塔とSX001検出状況

図版3

有添田遺跡遠景（正面丘陵上）

山王橋（竹田市有形文化財）

坂折日吉神社境内宝筐印塔

坂折日吉神社境内石幢

分布調査時の1号石塔

分布調査時の2～4号石塔

分布調査時の3号石塔

調査前状況（南から）

調査前状況（北から）

図版5

遺構検出状況（南から）

完掘状況（南から）

1号石塔南面（調査前）

1号石塔南面笠

1号石塔南面塔身種子

1号石塔南面基礎格狭間・反花

1号石塔南面基礎針金確認状況

1号石塔基壇組検出状況（南から）

2・3号石塔（調査前）

2・3号石塔（遺構検出時）

2号石塔

3号石塔

4号石塔正面・右側面（調査前）

4号石塔

SK002検出状況（南西から）

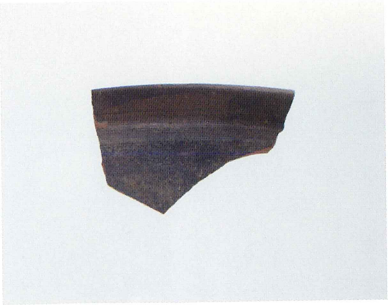
SK002完掘状況（南西から）

SX001検出作業

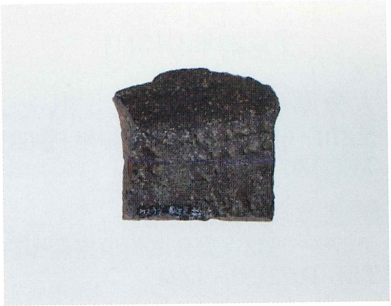
1号石塔撤去作業

4号石塔撤去作業

4号石塔撤去作業



採集遺物（第13図1）



採集遺物（第13図2）

採集遺物（第13図3）

報告書抄録

ふりがな	うすうだいせき
書名	有添田遺跡
副書名	県道白丹竹田線（飛田川工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 93 集
編著者名	横澤 慈
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分市牧緑町１番６１号 TEL 097-552-0077
発行年月日	西暦 2017年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
うすうだいせき 有添田遺跡	たけたしおおあざひらたあざうすうだ 竹田市大字平田字有添田13	44208	208473	32° 57′ 57″	131° 21′ 59″	2015.6.10 ～ 2015.6.22	32㎡	県道白丹 竹田線道路 改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有添田遺跡	集落	中世	石造物４基（宝篋印塔1、板碑2、角柱塔婆1）		

所収遺跡名	要約
要約	有添田遺跡の発掘調査は県道白丹竹田線道路改良工事に伴い実施した。 確認された遺構は4基の中世石造物で、その内訳は宝篋印塔1基、板碑2基、角柱塔婆1基である。4基の石造物の記録作成後、石造物を移転し下部遺構の確認を行った。その結果、角柱塔婆周囲で塔設置のためと思われる土坑を確認した以外に下部構造は確認されず、宝篋印塔は近年他所から移転されたものと判断された。 石塔の年代は宝篋印塔は14世紀末頃、板碑及び角柱塔婆は15世紀後半頃と推定される。特に宝篋印塔は石大工玄正の系譜に連なる工人の作と推定される装飾的な石塔である。

有添田遺跡

－県道白丹竹田線（飛田川工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第93集

平成29年3月31日

編集・発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870－0152　大分市牧緑町1番62号
TEL(097)552－0077

印　　刷　勉強堂美術精版社
〒876－0832　大分県佐伯市船頭町2－52
TEL(0972)22－1324